

虫プロ興亡記

安仁明太の青春

山本暎一



新潮社

虫プロ 興亡記

安仁明太
の
青春

山本暎一

新潮社

むし ころぼう き
虫プロ興亡記
あ に めい た せいしゆん
安仁明太の青春

印刷——一九八九年四月一〇日

発行——一九八九年四月一五日

著者——山本暎一
やまもと えいいち

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話——
業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——東洋印刷株式会社

製本所——大口製本株式会社

© Eitichi Yamamoto 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-373301-2 C0093

虫
プロ興亡記

安仁明太の青春

■目次

第一章	ある街角の物語	昭和35年10月～昭和37年1月……………	7
-----	---------	-----------------------	---

第二章	鉄腕アトム（1）	昭和37年2月～昭和38年1月……………	57
-----	----------	----------------------	----

第三章	鉄腕アトム（2）	昭和38年1月～昭和39年10月……………	111
-----	----------	-----------------------	-----

第四章	ジャングル大帝（1）	昭和39年11月～昭和40年10月……………	149
-----	------------	------------------------	-----

第五章	ジャングル大帝（2）	昭和40年11月～昭和42年3月……………	195
-----	------------	-----------------------	-----

第六章 千夜一夜物語・クレオパトラ・日本誕生 昭和42年5月〜昭和45年5月……………

227

第七章 哀しみのベラドンナ 昭和45年11月〜昭和48年10月……………

281

あとがき

346

参考資料・主なアニメ作品リスト

348

虫プロ興亡記

安仁明太の青春

山本暎一

私はいこう、夏の青き宵は
麦穂^{むぎこ}脛^{すね}刺^さす小径^{こけい}の上に、小草^{こくさ}を踏^ふみに、
夢想家・私は私の足に、爽々^{すがすが}しさのつたうのを
覚え、

吹く風に思うさま、私の頭をなぶらすだろう！

私は語りも、考えもしまい、だが

果てなき愛は心の裡^{うち}に、浮びも来よう

私は往^{むか}こう、遠く遠くボヘミアンのよう

天地の間^{かん}を、女と伴^つれだつように幸福に。

アルチュール・ランボオ「感動」

中原中也 訳

第一章

ある街角の物語

昭和35年10月〜昭和37年1月

電車がでて行くと、ホームには、とりのこされたように明太が立っていた。

（なんだよオ、これはア……！ 地の果てじゃないかア……）

一段高い駅のホームから、明太は、あたりをながめまわして、うんざりした。

昭和三十五年十月十二日。

西武池袋線の、富士見台の駅である。

そのころ、まだ、所沢に西武球場はなかったし、池袋にサンシャインシティもパルコもなかった。東京の北の盛り場、池袋は、東京の北の盛り場というよりは、埼玉の南の盛り場といったほうがびつたりする、パツとしない街だった。

そこから、武蔵野を西へ走る西武池袋線の黄色い電車に乗って十二、三分、五つめの練馬の駅で、もう沿線に畠がひろがり始める。季節によっては、あけた窓から大きな蛾がとびこんでくることもある。

富士見台は、練馬からさらにふたつ先だ。いまでは都

心に近い便利な通勤圏だが、当時はとんでもない遠くの片いなか、という印象だった。駅前の道に、古ぼけた家が映画のセットのように一列にならぶだけで、そのうしろはすぐ畠である。ひとかげなど、まったく見あたらない。

えらいところへきてしまったと思うと、明太は急に心細くなってきた。

安仁明太。

二十歳。一メートル六十七。六十一キロ。柔和な童顔だが、端の締まった唇が負けん気をのぞかせている。

長めの髪、黒の薄手のニットのシャツにモスグリーンのコールテンのズボン、茶色い表紙のクロッキー・ブックをかかえた姿は、このころの典型的な、画かきの若者のスタイルだ。

平日の午後は乗り降りの客もすくない。パラパラと降りた客が改札口へむかう。明太は、ひとつ深呼吸して、ノロノロと歩きだし、いちばんあとから改札をでた。

パスもはいれぬほどせまい駅前広場のすみに、猫が寝ている。先にでた人たちはたちまちどこかへ消えて、シーンと静まりかえった駅前の、いなかのよろず屋のよう

な店の横に、赤いペンキがほとんどはげ落ちた中華そば屋があった。

（なにか食べるとちつとはおちつくんじゃないか……）

昼めしは食べてきたので腹はへつていなかったが、明太は、中華そば屋のはめこみガラスのドアを押した。

「いらっしやい……」

女のダミ声がめんどくさそうにむかえる。

外は陽ざしที่明るいのに、薄暗い店の奥にはあさんがひとり、いすの上に正座し、テーブルに新聞をひろげ、老眼鏡の縁ごしに明太を見ている。

（まずいところへはいった……）

そう思ったが出るわけにもいかない。入口に近いテーブルにつきながら注文をする。

「ラーメンちょうだい」

「時間かかるわよ。じいさんがうつわさげに行ってるから」

（やつぱり……）

いやな予感はあるものだ。しかたがない。

「いいですよ」

「そう？　悪いわね」

ばあさんは新聞に目をもどす。水もだしてくれない。

（こんなもんだらう。いなかんだから、ここは……）
自虐的な気持ちになる。

腕時計を見ると、二時ちょっとすぎだ。三時までには、たっぷり時間がある。明太は目をつむった。

これから行こうとする先のことを考える。

漫画家の、手塚治虫をたずねようとしているのだ。手塚がアニメーション映画をつくる準備をしていると週刊誌で読んで、じつとしていられなくなった。なんとか、アニメーターとして参加させてもらえないものか……。

アニメーターとは、広義にはアニメーション映画をつくるひとすべてをいう。狭義には、アニメーション映画の動きをつくりだすひと、すこしずつ位置をずらせた画を何枚も描いたり、カメラの前で人形のポーズをひとコマごとにずらせたり、するひとのことである。近ごろの、コンピューター・グラフィックスをつくるひと、もちろん、アニメーターといっている。

明太は、わずかだが、アニメーターの経験があった。高校をですぐに、漫画家の横山隆一が主宰する鎌倉のおとぎプロへはいることができ、そこに二年ほどいて、先日やめたのだ。

手塚とは、まったく面識がなかった。面会の約束もと

っていない。電話をかけて約束をとることは考えたが、電話口でことわられてしまうといけなかったのでやめた。それより、とびこみで行ったほうが、可能性がありそうな気がした。三時ごろには手塚もお茶にするだろう。そのとき、タイミングよくこんにはと顔をだせば、忙しい仕事から解放された気分のはずみで、会ってくれないともかぎらない。

明太は、そこに賭^かけた。

(それにしても……、ラーメンはどうなったんだ?)

かなり時間がたつたはずなのに、じいさんが帰ってきたはいはない。ふりかえつてばあさんを見ると、眠っている。

「あのオ……」

起きない。声をあらげる。

「あのオ!」

ばあさんはびつくりして目をさました。

「ラーメン、おばあさんはつくれないんですか?」

「あたし? でも、おじいさんのほうがうまいわよ」

「いいですよ、おばあさんで」

「そうねエ。あんまり待たせても悪いわね」

ばあさんはよつこらしよといすからおり、下駄をつつ

かけて調理場へはいって行った。ブーンといい匂いがつたわってくる。

期待しなかったからか、ラーメンはけっこうな味だった。食べると、やはり気持ちがおちつく。ひとみしりする性質^ちで、初対面の相手としやべるのはあまり得意ではない明太だったが、軽口がでた。

「ごちそうさま。おいしかったよ」

「あら、そう?」

ばあさんは顔をほころぼせる。

「おばあさん、このへんに、手塚治虫さんの家ある?」

「チツカオサムさん? 知らないねエ……」

「最近、新宿の方から越してきたんだけど。手塚治虫は知ってるよね?」

「いいえ」

「あれ? おばあさん、手塚治虫、知らないの?」

「知らないわ」

「へーエ、おどろいたなア。手塚治虫を知らないひとがいるなんて」

「そんなに有名なの?」

「有名だよオ。天皇陛下と美空ひばりと手塚治虫を知らないひとは、日本人じゃないっていわれるよ」

「知らないねエ、あたしや」

「ばあさんはムツとした。ちよつといいすぎたらしい。
「じゃア、ここはわかるかしら？」」

明太は、クロッキー・ブックの最後のページをあけて
見せた。しらべてきた手塚の新しい住所が書いてある。

手塚治虫

東京都練馬区谷原町一ノ一九一ノ一

のぞきこんだばあさんは、明太を見てニッコリした。
「ヤハラチョオならわかるよオ。はなからそういえばいいのに」

富士見台の次の駅、石神井公園いしかみぎんこうのほうへ、線路ぞいにあるいて十分ほど。手塚の家はすぐわかった。

畠のまんなかに、二階建ての、白い、四角い、コンクリートづくりのモダンな建物が、ドーンとそびえたつて、秋の陽をはねかえし、光りかがやいている。屋上には小さなペントハウスもある。家というより、いかにも児童漫画界の帝王手塚の貴族を感じさせる、城館だ。

明太は、どきもをぬかれて足がすくんだ。

とにかく、勇気をふるいおこして、近づいてみる。

建物の周囲を白いブロック塀がとりかこみ、同じく白のブロックを積んだ四角の門柱に、黒のプレートで『手塚治虫』の文字がはまっている。

ピツタリ閉まった鉄パイプ製の門の扉も黒だ。十メートルほど奥に玄関がある。ベルは玄関のドアの横についているので、押そうとすると門をはいって行かねばならない。

家のなかにはひとがいるのかいないのか、まったく静かである。いかにも新築らしく、まだ庭は赤土がむきだしで、ところどころに芝生が植えかけになっている。

門の扉にさわってみると、錠はかかってなくて、ゆらりと動いた。明太は急に、こわさがこみあげてきた。あけようとするのだが、力がはいらない。からだがいびれたみたいで、冷汗がでてくる。さつき、ラーメンで得たおちつきなど、どこへやらだ。

モオオ！

だしぬけに背中の上しろで牛が鳴いた。

明太はとびあがった。

どうしてそれまでわからなかったのだろう。手塚邸の門の前は、道をへだてて草地になっていて、五、六頭の

乳牛が、立ったり寝そべったり、勝手な姿勢でのんびり草をたべている。

（こんなものが見えなかったのか……）

明太は、完全にあがっている自分を知った。このままではとてもはいってはいけない。気分をたてなおすために、そのへんをすこし歩いてみることにする。

パラパラと農家があつて、畠で草を燃しているひとがいる。まさに、絵に描いたような田園の風景である。どのくらい歩いたか。ふと気がつくと、雑木林の枯れ枝ごしに、遠く西南の空に富士山が見えた。

（あ、だから富士見台……）

そんなことに感心している場合ではない。富士山の上に陽が落ちかかっている。三時などはとくにすぎて、夕方がちかいのだ。

（それでも行くか。あきらめて帰るか……）

死んだ気になって、明太は突進した。門の扉を押しあけ、玄関まで行き、ベルを鳴らす。

ビー……。

ひとの気持ちなどおかまいなしの、のんびりした音がひびく。明太は、走って逃げだしたいのをけんめいにかまんした。

「ハイイ」

なから澄んだ女性の声がかたえた。おそるおそるドアをあける。端正な顔だちの若い美女が、明太をみつめて立っている。

（奥さんだな……）

そう直感した。必死の思いで口を開く。

「あの、ぼく、安仁明太といまして、おとぎプロでアニメーターやつてた者ですが、先生がアニメーションはじめられるって聞いたもんですから、使っていただけなにかと思ひまして」

「お約束ですか？」

「いいえ」

（やつぱりだめか……）

絶望感がよぎる。

「ちよつとお待ちになつて」

意外だった。美女はそういう残すと、廊下の奥へ消えた。待つてゐる二、三分が、永遠のように長い。

かわつて、おもながで、ひよろりと背の高い、ひとのよさそうな青年がでてきた。折りめの消えた綿ギヤバジンの作業ズボンに絵の具がついているから、手塚のアシスタントだろう。ズボンの前のチャックがあいていて、

白いパンツがのぞいている。

これが、のちに『ダメおやじ』『ぐうたらママ』『減点パパ』『寄席芸人伝』などで、漫画家として大成する古谷三敏である。

古谷は、のんびりした口調で、

「先生が会いたいそうですから、あがつてください」

そういうと、ノソノソと、明太の前へスリッパをそろえた。

2

明太は、まだ信じられなかった。

手塚邸の応接室は、玄関をあがつて廊下の先の左側にある。その、ドアにいちばん近いソファに、腰をおろしているのだ。

奥はガラス戸で、庭にでられるようになっており、手いれ途中の荒土と植えかけの芝生が見える。

案内してくれた古谷が、「先生すぐくると思いますから」といいのこして去ってから、ぼつぼつ二十分になろうとしている。日がかげつて、室内はすこしくらくなってきた。静かな家のなかの、どこかでかすかな人声が聞

こえる。あれが手塚だろうか……。

明太は、手塚についての知識を、頭のなかでくりかえした。

手塚治虫、本名は治である。

大正十五年（没後、ほんとうは昭和三年とわかったが）十一月三日に、大阪府の豊中市で生まれ、のち、兵庫県宝塚市へ移って子供時代をすごした。

漫画は小学校へはいる前から描いていたという。博物学や天文学に興味をもち、五年生のとき、昆虫のオサムシからとつて、治虫とペンネームをつけたというから、かなりかわったところのある天才少年だ。

昭和二十年、大阪大学の医学部へ進学するが、漫画は描きつづけた。翌昭和二十一年、毎日新聞社発行の少国民新聞に、『マアちゃんの日記帳』という四コマ漫画の連載を開始、プロの漫画家としてデビューする。

次の年、昭和二十二年、描きおろしの単行本で、長編ストーリー漫画『新宝島』をだすと、爆発的なベストセラーになる。

それまでの漫画は、一コマか四コマが基本で、ストーリーがあるものもごく短く、構図も平凡だった。そこへ